

手に取りたくなくなる酒器シリーズ 焼き物産地の伝統を継承

近藤賢 福島/陶芸家

水や大気の流れを感じる逸品



プロダクトの制作に打ち込む近藤さん

色合いは、それぞれ瑠璃色と青白磁の二色。瑠璃色は、高貴さを漂わせる締まった雰囲気を持ち、青白磁はさわやかな印象を受ける。ろくろで形成する際、指の跡を付けることで、釉薬(ゆうやく)を付けた後の焼き上がりでは、色の濃淡によって水面に広がるような、波紋状の色が浮かび上がる。

一月十七日、都内で開かれたプレゼンテーションでプロダクトが披露された。プロダクトを見た人は、その美しい色合いに足を止め、大気や水の流れを感じさせる流線型の形状に「触っていいですか」と手に取った。苦悩して作り上げたプロダクトに自信が宿った。

近藤さんは「ここからがまたスタートです」と語る。四月にはいわき市四倉に新たな工房が完成する。LEXUS NEW TAKUMI PROJECTによって生まれた酒器シリーズでさらなる飛躍を目指す。



下川さんと近藤さん(右)

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故によって失われた焼き物産地に、新しい息吹を吹き込み、未来への光を見出そうと、本プロジェクトに臨んだ近藤さん。十代続く窯業地で継承される技法を用いながら、陶芸家としての個性を発揮しようとして挑戦した。

本県を代表する伝統的工芸品の大楯相馬焼は、青いひびき走り駒「二重焼」を特徴とした三百年以上の歴史を持つ焼き物だ。大楯相馬焼の産地である浪江町は、原発事故によって避難地区に指定された。産地の未来が閉ざされる危機に陥ったが、窯元はそれぞれの避難先で陶芸を続けるなど、先人たちから受け継いだ伝統の技を後世に残そうとしている。

近藤さんは、いわき市内に家を借りて、二〇一二年(平成二



新しい工房とギャラリー

十三年の秋から、父親の学びと陶芸を再開させた。親子二人三脚で苦境を乗り越え、日展の工芸美術部門で入選したほか、日本現代工芸美術展で賞に輝くなど、精力的に活動を続けている。周囲からの協力も大き



様々な道具で形成する

昨年六月、都内で開かれたキックオフ・セッションには全国の匠が集まった。下川氏は近藤さんの作品を手に取り「形や色にパリエーションがあるといい」とアドバイスした。磁器の質感を大切にしながら、繊細さと力強さを両立させることをプロダクト制作のテーマに決めた。「手に取りたくなる器、触れなくなる器を目指し、使う人のことを考えて作りま

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。



プロダクトへの思いを話す近藤さん

本プロジェクトは二〇一六年、放送作家として「料理の鉄人」など多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェク

「匠」を応援する。本プロジェクトは二〇一六年、放送作家として「料理の鉄人」など多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェク

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



全国の匠が集まった商談会

「伝統を守りながら」「新しい感覚やテクノロジーを吹き込む」「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。福島県選出の匠、近藤賢さんのモノづくりにへかける思いと完成した作品を紹介する。

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



素材の質感を生かした作品に



近藤賢 福島/陶芸家

1980年大楯相馬焼陶吉郎窯、近藤学の長男として福島県浪江町に生まれる。2005年文星芸術大学大学院修了後、栃木県益子町にある益子陶芸美術館に勤務。2010年、福島県浪江町に戻り作陶する。2011年東日本大震災の影響により福島県いわき市に工房を移す。2013年仙台パルコの5周年記念のポスターに掲載される。現在、現代工芸美術家協会本会員、福島県総合美術展招待を務める。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT



完成プロダクト「innocent blue(イノセント・ブルー)」酒器シリーズ